
総合短編集 1

高瀬 悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

総合短編集1

【Nコード】

N0101V

【作者名】

高瀬 悠

【あらすじ】

思いつくことを思いつくままに書いてみた。

【夢幻のアリス】

やあ、アリス。

君も物好きだねえ。またこの国に来たのかい？

え？ 僕のことを覚えていない？

そうか。ならば改めて自己紹介をしよう。

僕はこの国の案内者。君をここに導いたのは僕さ。

この国はイカレている。

なぜならこの国を作っている奴がイカレているからさ。

そう。今なおこの国は作られ続けている。

いくつもの世界を交錯させ、そして一つの国を作り上げる。

この国は馬鹿げている。

そう思わないかい？

本当はこの国なんて無いに等しい存在だったんだ。

それなのに、そいつはこの国を創り出してしまった。

そいつを見つけ出すんだ、アリス。

そして止めてくれ。

この世界を。

この国を理解できるのは君だけだ。

全てを知る君にしか理解できないイカレた国さ。

君ならきつとできる。

いや、君にしかできないことなんだ。

さあ行こう。

これから僕がこの国を案内してあげる。

【Dark・Hunter】番外編1

「貴様が悪の根源か……」

突然俺の前に現れたそいつは、明らかに変態だった。

それはある清々しい一日の始まりに、時を遡る。
陽が真上に昇った頃にベッドから起床。

気だるくノビをしながら階段を降り、一階の酒場に辿り着くと、
客のいないカウンターにどっかりと腰を下ろす。

いつものようにカウンターの向こうにいる亭主　好々爺然とし

た老人の恩恵で朝飯をもらい、

「クルド。いつになったらツケを払うんだい？」

「いつか払う」

亭主の言葉を軽やかに流して、いつものようにパンにかじりつく。
そしていつものように、貧相な格好をした黒髪の少年に話しかけ
られ、

「クルド。一体いつになったらオレの依頼を受けてくれるんだ？」

もう一月半も過ぎたんだぞ」

「つるせえガキだな。俺はやらねえもんはやらねえつつってんだろ。
いいかげん帰ってくれ」

「嫌だ」

「『嫌だ』じゃねえよ。また栄養失調になって俺の前で倒れるつもりか？　一月半もここにいりゃあ庶民暮らしがどんなに辛いか身にしみてわかっただろ？」

「最近、友と呼べる者が出来た」

「むかつくほどエンジョイしてんじゃねえかコノヤロウ。もういいかげん帰れ。迷惑だ」

「クルドに言われたことは全部してきた。掃除もできるようになったし、洗濯もできるようになった。落ちた金も拾えるようになったし、庶民の食べ物も口にできるようになった。ロン爺の手伝いもできるようになったし、それに庶民と会話もできるようになった」

「全部過去形じゃねえか。その中で現在進行形のものはいくつある？」

「……………」

少年はしばらく無言で考え込んでいたが、やがて黙ってクルドに指を突きつける。そして、

「一つだ」

「は？」

「現在進行形の一つだ。今立派に、庶民と会話ができている」

「上から目線かよ」

「そろそろ心が折れそうだ」

「もういいから帰れ、てめえは」

と、いつものように少年と会話を交わし、いつものように依頼を拒否する。

そんな時にいつものように酒場の窓から幼馴染みの女性 キヤシーが乗り込んできて、

「ねえ訊いてよクルド、事件よ事件。銅貨二枚出すから犯人逮捕に協力してくれない？」

「って、どっから入ってきてんだ！ 窓だろ、そこ！」

「ココの方が開いているから入りやすいのよ」

「どこの泥棒だ！ 一応警官だろ？ お前」

「一応じゃないわよ。ねえ、それよりも銅貨二枚あげるから」

「やらねえつつつてんだろ！ ったく。誰が今どきそんな低賃金で」
キラリと黒髪の少年の目が怪しく光る。

「オレがやる」

「やるな、お前は」

「銅貨が二枚ももらえるんだ。このチャンス逃したくない」

「お前、この一月半どこにプライド捨ててきた？」

キャシーの所へ行こうとする少年の腕をクルドはがしつと掴んで引き止める。

すると少年はクルドへと向き直り、真顔で言い放つ。

「クルド。オレ、ここで生活してきてわかったんだ。プライドで腹は満たせない」

「悟るな。それ言われると俺が泣きなくなる」

「銅貨二枚あれば白いパンが食べられる。そしたら隣に住んでいるお婆さんと半分ずつして食べるんだ」

「どこの山娘だ。いいからお前はもう口を閉じろ。いいな？」

「でも白パンが」

「いいから座ってろ、ここに」

少年の肩を掴んで引き寄せ、無理やりカウンターの椅子に座らせる。そして入れ替わるようにクルドは席を立ち、キャシーの元へ歩み寄った。

キャシーがクルドを涙目で見つめて同情する。無言でクルドの手を取り、その手にそつと銀貨二枚を握らせる。

「これであの子においしい物を食べさせてあげて」

クルドはすぐに突き返す。

「いらん。全てはアイツをここから追い出す為にやってんだ。こういうことをしたらいつまで経っても出て行かなくなる」

「やっと父親と再会できたのよ？ それを出て行かせるなんて非情にも程があるわ。悪魔にでも取り憑かれたわけ？」

「ちよつと待て。父親って何のことだ？」

「あの子、あなたの隠し子なんでしょ？」

「誰だ？ そんなデマを流したのは」

「え？ ラウルだけど」

「あのクソ盗賊っ！」

クルドは怒りに拳を握り締めると、銀貨を持ったまま酒場を飛び出した。

そして現在。

「貴様が悪の根源か……」

スラム街へと向かう途中のその路地裏で、クルドは黒のブリーフのみを身につけた成人男性と対面する。

それは最悪で最低なる不運の始まりであり、のちに魔女アーチャ事件を解決して、酒場に居候していたあの黒髪の少年　クレイシスが、やっと家に帰ってくれるその日まで。

クルドはその変態に影でしつこく付きまとわれることとなる。

ある朝、目が覚めて朝食をとろうと居間に行ったらお祖父ちゃんが女の子になっ

「浩志、起きなさい！ 学校に遅刻するわよ！」

ある朝。

俺は母親の声で目を覚ます。

あと少しと言いたいところだが本当にギリギリにしか起こしてくれない為、これで寝たら完全に遅刻する。

まだ眠い目を擦りながら、俺はベッドから重い体を起こした。

パンツ一つの身から制服に着替え、机に放り投げたままの鞆を手に、部屋を出る。

二階建てとなるこの一軒屋に、俺たち家族は二世帯で暮らしていた。

この家は祖父母が建てた家だ。

だから祖父母の意に従い、朝食は必ず家族そろってとることになっている。

特に厳しい家訓があるわけではないが、これだけは崩してならないという決まり事だ。

俺も小さい頃から当たり前のようにそう暮らしてきたので別に不都合を感じたことはない。

いつものように二階から降りて一階の廊下を歩き、そして家の中心部にある居間へと辿り着く。

香りくる味噌汁と、この匂い 今日焼魚か。
途端にお腹がすいてくる。

俺は居間のドアを開け、すでにそろっているであろう家族に朝の挨拶をした。

「おは……」

言葉半ばで俺は、ものすごく違和感があることに気付き固まった。家族が挨拶を交わしてくる。

「おはよう」

新聞で顔を隠して素っ気無い挨拶をしてくる父。

「おはようヒロ君」

いつもニコニコと朗らかな祖母。

「ヒロ、ほら早く食べてしまつて。学校に遅刻するわよ」

忙しく朝食の準備をしている母。そして、

「よお」

違和感。

味噌汁を飲みながら気軽に片手を挙げて、幼稚園児の年長さんほどの女の子に上から視線で挨拶される。

和風美人とはこのことか。いや、もう少し歳を重ねたらその言葉が似合いそうだ。二つ結びの長い黒髪を腰の辺りまで垂らし、着物姿の見知らぬ女の子は何食わぬ顔でごく自然と家族の中にとけ込んでいた。

「誰だ？ お前」

俺はその女の子を指差し、啞然と口を開けて訊ねた。
すると家族から意外な反応が返って来る。

「朝から何寝ぼけたことを言っているの、ヒロ。お祖父ちゃんですよ？」

父が新聞の向こうから、

「馬鹿なことを言つてないで早く食べなさい。ヒロ」

「お祖父さん、口にご飯粒が」

「悪いなタカ子。取ってくれ」

女の子の口についたご飯粒を祖母が普通に取っている。

いつも見る光景だが、何かが違う。

「ヒロ。いつまでそこに立っているの？ ご飯食べる時間がなくなるわよ」

この違和感は俺だけですか？

「……………」

もしかしたら俺はまだ夢を見ているのかもしれない。

夢ならば、どうせここで突っ込んだとしても家族の冷たい反応しか返ってこないだろう。

それならばこの与えられた設定に合わせていくしかない。

俺は違和感を心の奥底に押し込めて、圧縮して、さらにメガトンパワーを駆使してダイヤモンドができるまで圧力を掛け続け
女の子が俺を見つめて声をかけてくる。

「浩志。座りなさい」

「はい」

口調はまんまお祖父ちゃんだけだなあ。声と姿が……。
項垂れて、俺は仕方なく自分の席に座った。

テーブルに並べられたご飯、焼き魚、味噌汁、そして漬物。
女の子が母に湯のみを向ける。偉そうな口調で、

「亜矢子さん、茶を頼む」

「はいはい、お義父さん」

……。もう何も考えないことにしよう。

俺はいつものように朝食を済ませ、学校へと旅立った。

最強 赤ずきんちゃん

ある日、夢の中 クマさんに 出会った……

「……………」

セレアはある日、とても不思議な夢を見ました。

それは花咲く森の道で、大きな体格をした円らな瞳のクマさんと鉢合わせをした夢でした。

クマさんは言いました。

「あ、やべえ。夢のお告げをしようとしたら金太郎さんと間違えた」

「私のどこをどう見て金太郎と間違えたわけ？ しかもクマが夢のお告げって何？」

「今度山で勝負しようって、金太郎さんに伝えといて」

「なんで私が仲介しなきゃいけないわけ？ 自分で伝えなさいよね、そんなこと」

「えー。やだよ、そんなめんどくさい」

クマは夢の中からログアウトして消えました。

「ちよっ、ログアウトって……！ どこの世界よ、これ！ ってか、この場面すごく物語に関係ないよね！？」

改・最強 赤ずきんちゃん

「おはようございます、お嬢様」

それはある日の、とても清々しい朝の出来事でした。

いつも通りにベッドで目を覚ましたセレア。その視界に飛び込んできたのは、立派な燕尾服に身を包んだ銀髪のイケメンでした。

セレアは真顔で言いました。

「私、あなたを指名なんてしてないし、ドンペリを頼むお金も持っていないから」

「お嬢様、この物語は全年齢でございます。それ相応のセリフにてお願いします」

「あんた誰？」

「羊でございます」

「執事？」

「いえ、羊でございます。お嬢様」

「どの辺が？」

「主にこの耳元でくるとしたくせつ毛でございます」

「それだけ？」

「それだけでございます」

「それで羊は無理があると思うんだけど……」

セレアはベッドから降り、そして言いました。

「羊が私に何の用？」

「旅立ちのお供に、と思ひまして」

「何その携帯電話のCMみたいな言い方」

「お嬢様、終電の時間でございます」

「乗らなくていいから」

セレアは断って、台所にいる母親の元へと歩き出しました。

「お母様ー！　なんか家に変な人がいるんですけどー」

セレアは家中を歩き回って母親の姿を探しました。
居間や風呂場そしてトイレ、全ての部屋を探し回ったのですが、
どこにも居ません。

「あれ？　お母様が居ない。お庭の草取りでもしているのかしら？」
セレアは玄関のドアを開けてお庭に出ました。
すると、

「よお、引きこもりのプリンセス。やっとお城を出る気になれたかい？」

どこからか声をかけられてセレアは目を向けました。

周囲を見回すが、誰も居ません。

「ここだぜ、プリンセス」

下から声が聞こえてきて、セレアは視線を落としました。

そこには羽のついた赤い帽子、腰に剣、赤い長靴をはいた白猫が
二本足で立っていました。

白猫はセレアの手を取ると、紳士のように手の甲に優しくキスを
しました。

「俺はあんたについていくことに決めた。鬼退治だろうがドラゴン
退治だろうが、地獄の果てまでついていくぜ」

セレアはお庭を見回しながら叫びました。

「お母様ー！　また変なのが来てるんですけどー！」

「あんたの母親ならついさっき、ドラゴンに誘拐されたぜ」

「はあ！？　嘘でしょ、ちよつと待って……」

セレアは話を止めると、眉間に人差し指を当てシワを寄せて考え
込みました。

「さあプリンセス。考えている時間なんてないぜ」

背後から声。

「お供します、お嬢様」

「ぎゃあ！」

セレアは悲鳴を上げて振り向きます。

「いきなり背後から声かけないでよね！」

「さあ旅立とうぜ、プリンセス」

「うるさいわね！ ドラゴンって何よ！ 完全に何かがおかしいで
しょ、これ！」

するとそこに黒狼の少年がやってきました。

黒狼の少年は睨むように自称羊の青年と目を合わせました。

「誰だ、お前」

「羊です」

「どこの執事だ？」

「三軒隣の田中さんの牧場です」

「牧場主の執事か」

「いえ、リーダーは立派な角を持った者が別にいます」

「へえ。腕に名のある者が……」

「って、会話がみ合ってないからね二人とも！」

「セレア」

黒狼の少年はセレアに向けてきつぱりと言いました。

「結婚を早まるな」

「何のことよ！」

「今の言葉は聞き捨てなりませんね」

自称羊の青年はセレアを庇^{かば}うようにして前へ進み出ると、懷から短剣をスツと取り出して構えました。

黒狼の少年は不敵に笑います。

「面白え。オレと勝負しようってんだな？」

黒狼の少年は両手を獣爪へと変化させました。

自称羊の青年は短剣を逆手に持ちかえると、黒狼の少年にいきなり斬りかかります。

黒狼の少年は寸でのところでそれを飛び退くと、相手との距離をとりました。

「なかなかやるじゃねえか」

「まだまだこれからですよ」

「ちよつとあんた達！　そういうのはココでやらずに向こうでやりなさい！」

セレアの言葉に白猫が呆れるように言います。

「そういう問題か？　プリンセス」

黒狼の少年が鋭い獣爪を構え、自称羊の青年に襲いかかりました。

「牙流斬撃！」

黒狼の少年の獣爪が巨大化し、自称羊の青年を切り刻みます。

それを見たセレアは色んな意味で悲鳴を上げて叫びました。

「ちよつとおおお！　十五禁じゃないんだからね、これ！」
すると、

「幻影ですよ」

自称羊の青年はいつの間にかセレアの家の屋根に立って、こちらを見下ろしていました。

黒狼の少年は悔しそうに舌打ちしました。

「アイツ、人間じゃねえ」

自称羊の青年は平然と言葉を返します。

「はい。羊ですから」

その言葉に黒狼の少年はブチ切れました。右腕を振りかぶるように構えて、

「執事も人間だろうがッ！」

叫んで、構えた右腕を激しく振り下ろしました。生まれた斬撃が庭の地面をえぐって破壊し、真っ直ぐにセレアの家に向けて飛んでいきました。

「ぎゃああああ！」

セレアはムンクにも負けない顔で叫びを上げました。

白猫がセレアの手を引いて安全な場所へと避難します。

自称羊の青年は屋根の上をひらりと飛び降りて逃げました。

黒狼の少年はがく然とします。

「なっ……！　しまった！」

「甘いですね」

斬撃を受けて木っ端微塵に壊れいくセレアの家を背後に、自称羊の青年は華麗に着地しました。

「私の家がぁぁぁッ！」

「今度はこちらの番ですよ」

セレアは、ずきんから素早く巨大バズーカを取り出すと、涙目になつて吼ほえました。

「他所でやれつて言つてるでしょ！」

怒りのままに自称羊の青年に向けて発射します。

砲口が火を噴き、軌道に沿って砲弾が飛び出していきました。

自称羊の青年はそれをひらりとかわしました。

そのまま砲弾は三軒隣にあつた離れの家を直撃しました。

自称羊の青年はそれを見つめてぼそりと呟きを落とします。

黒狼の少年も白猫も一緒になつて呟きました。

『田中さん家の牧場が』

……………。

セレアはそそくさとバズーカをずきんの中に隠すと、何事もなかったかのように旅支度を始めました。

「えーっと。これからどこを目指すんだっけ。　あ、そうそう。

ドラゴンよ、ドラゴン退治。お母様がさらわれたんだっただわ」

いくしょッ！

【前回のあらすじ】

俺こと 高校二年の飯田圭吾いいだけいは、ある日の放課後、幼馴染みの暴力女 綾野春香あやはるかに身に覚えの無いことで喧嘩を売られ、『明日の十時、例の遊園地に一人で来い』と無理やりペアチケットを渡される。

翌朝。仕方なく遊園地へと出かけた圭吾だったが、その道中で突然、魔法少女のような格好をした黒髪ツインテールの女の子に道をふさがれ指を突きつけられるのだった。

「我が名はピーチ・フレイム。お前を迎えに来た召喚獣だ。アーレス様選ばれたことを泣いて喜ぶがいい」

「えっと……」

俺はぽりぽりと頬を掻いて対応に困る。

かわいい顔して非常に残念なお子様だ。いったいどんなアニメに影響されたのだろう。

女の子は俺に指を突きつけたまま言葉を続ける。

「喜べ。お前はアーレス様より大事な使命と住民権を与えられた。そのことをこの国で存分に誇るがいい」

「なんつーか……。悪いが、そういうのはお友達とやってくれるかな？」

女の子は愕然と目を見開き、身を仰け反らせる。

「なッ！？ 貴様、まさかこの名誉ある使命を断る気にいるのか！？」

俺は困った。助けを求めるように人通りのないこの道に視線をさまよわせる。どこか近くにこの子を保護できるところはないだろうか。

「おい貴様、聞いているのか？」

話しかけられるが無視する。

俺は疲労のため息を吐いて項垂れるとぼそりと呟いた。

「昨日からとことんツイてねえな」

脳裏を巡る、昨日起きた身に覚えの無い災難の数々。拳句の果てにはこれかよ。

するとこちらを真似るかのように女の子もため息を吐く。

「なぜこのような奴が選ばれてしまったのか解せん。アーレス様は何をお考えなのか」

俺は隙なく言い返す。

「じゃあ他の奴に声かけろ。まずは交番へ行け。交番はこの向こうの通りを右に曲がればすぐに見つかる。交番つてわかるよな？ おまわりさんが居るところだ。そこでおまわりさんと一緒に遊べ。な？ 俺はマジで時間がねえんだ」

「そうもいかん。アーレス様がお選びになったからには、たとえ見た目がどんなに幸薄そうでも心荒んだ異世界人であろうと連れて行かなければならない」

「ちよい待て。それは俺のことか？ 俺のことを言っているのか？」

「とにかく、もう時間がない」

急に女の子は俺の手を掴み、どこかへ連れて行くこととする。

「来い。こつちだ」

「ちよ、オイ」

前のめりに転びそうになるのを何とか踏みとどまり、女の子の手を振り払う。

「頼むから別の奴に声をかけてくれ。俺は暇じゃないんだ。待ち合
わせをしているんだよ」

女の子が「ほお」と目を細めて、

「ならば、時間を止めれば貴様は暇になるのだな？」

「は？」

一瞬にして、この世界から音が消えた。

女の子は微笑する。

「全ては貴様の行動しただ。この世界の時間を元に戻したければ
一緒に来るがいい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0101v/>

総合短編集 1

2011年10月7日03時18分発行